



Global Mental Health の実践について

SUMH 理事長 青木 勉

自宅近くの遊歩道には水仙の花が咲き揃い、春の訪れを告げていますが、会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

昨年10月、カナダ・バンクーバーで開催された環太平洋精神科学術会議 (PRCP) に、当会を代表して丸谷先生、西尾先生とともに参加しました。その会のテーマは、Global Mental Health、まさしく SUMH の設立趣旨にふさわしい学会が開催されました。PRCP に参加して改めて感じたことは、WHO の提唱する “ No Health without Mental Health ” が、開発途上国でも実践されるべきであるという一般論が、ようやく国際的に認知され始めたということです。しかし、その実践の具体的報告は、非常に少なく、SUMH の今までの活動が、環太平洋という幅広い地域においても、オンリーワンであることを知ることができました。

私たちの活動は、カンボジア現地でも高く評価され、利用者は増える一方です。そして、日本国内の会員も順調に増え、ついに100名を超えました。急激な円安で経済的な逆風が吹きつける中ですが、今後も増え続けるメンタルヘルスケアの需要に対応できるように、経済の安定化を図らなければいけません。会員の皆様方には、引き続きなお一層のご支援をお願いして、ご挨拶とさせていただきます。

今号では広報活動兼研究発表で青木理事長、丸谷先生、西尾先生が昨年10月に参加されたPRCP(環太平洋精神科医会議:カナダバンクーバ開催)の報告と丸谷先生と西尾先生が視察にいかれた中部アフリカ・ガボンの精神科医療の報告を皆様にお届けいたします。

PRCP(環太平洋精神科医会議, バンクーバー)への参加

東京工業大学保健管理センター 丸谷 俊之

中部アフリカ・ガボンの精神科医療

東京工業大学保健管理センター 丸谷 俊之

事務局からのお知らせ

編集後記

篠原慶朗

発行: 途上国の精神保健を支えるネットワーク

Supporters for Mental Health; SUMH

I PRCP (環太平洋精神科医会議) への参加

東京工業大学保健管理センター 丸谷 俊之

昨年の10月5日より7日まで、カナダ、バンクーバーのフェアモントホテル・バンクーバーで、第16回環太平洋精神科医会議 (PRCP) が開催されました。

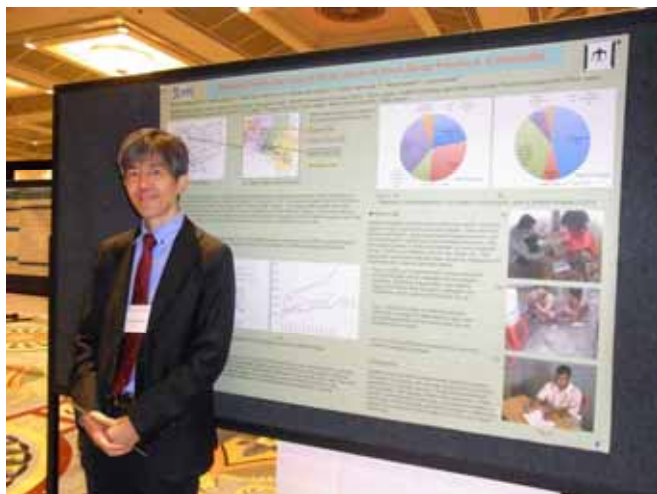
SUMH のメンバーからは、青木理事長、西尾、丸谷の3名が参加し、ポスター発表を行いました。演題は順に下記の通りでした。

・ The Asahi Model:

a Model for Deinstitutionalization in Japan

・ Prevalence of Mental Illness, Intellectual Disability, and Developmental Disorders among Homeless in Nagoya City, Japan

・ Mental Health Services in Rural Areas in Siem Reap Province, Cambodia



発表の様子

筆者の発表は、SUMHの活動のうち、アンコール・チュムとクラランについて、家庭訪問を通じて鎖から患者さんを解放するという症例も含めて発表しました。

全体の発表の中では、Vikram Patelによるグローバルメンタルヘルスの講演が我々の活動に関連する内容でした。世界を見渡したプロジェクトなのですが、具体的な実践の話に欠けるところがあり、その点はSUMHの地道な活動の意義を再認識できました。



また、大会長のソーマ・ガネサン先生とも話をする機会を持つことができ、今後の当会の活動についてアドバイスをいただきました。

筆者は、ガボン行きの後体調を崩し、ひどい頭痛にみまわれ、参加が危ぶまれましたが、何とか無事会場に到着できました。TPOカンボジアのソティアラ先生にも、昨年2月以来会うことができ、ハグしましたよ。

このとき、TPOの20周年記念式典に、SUMHのスタディツアーの後に寄るという約束をしたのです

が、その後再度体調不良で入院もしてしまい、いずれも参加することができなくなってしまいました。一緒に引率する予定だった西尾先生、大事な行事に招いてくださる予定だったソティアラ先生のお二人に、多大なご迷惑をかけてしまいました。

来年度の目標は体調を保ちつつ活動を続けることです。今後ともよろしくお願いいたします。(了)

II 中部アフリカ・ガボンの精神科医療

東京工業大学保健管理センター 丸谷 俊之

この度、西尾と丸谷は、中部アフリカはガボンという国の精神科医療を視察する機会に恵まれました。ガボンは石油、マンガン、森林資源に恵まれ、政情は安定しており治安もよい国です。輸出相手国の第一位は日本で、シュヴァイツァーが病院を建てて医療活動を行っていた国はここなのです。

事の発端は、JICA青年海外協力隊でガボンの首都リーブルヴィルに派遣されている精神科ソーシャルワーカーの鑑景子さんから、SUMHにメールでコンタクトがあったことです。もとバックパッカーでアフリカ渡航歴のある私はあの「嫌な感じ」が想像できましたが、鑑さんは現地の活動でいろいろうまくいかないことがあり、カンボジアではどのように活動しているのか興味をもち、連絡を取ってきてくれたのでした。我々は逆にガボンがどのような状況になっているのかまったく知りませんから、この機会に実際に見に行こう、ということになりました。

西尾先生とはまずバンコクで落ち合い、そこからエチオピア航空に乗り、アジスアベバで乗り継いでリーブルヴィルへ向かいました。正味だけでも21時間以上のフライト時間でしたが、行きはさして疲れませんでした。

レオン・ムバ国際空港で出迎えてくれた鑑さんは、バイタリティあふれる実に「コミュ強」な人で、あちこちに声をかけてくれていて、盛りだくさんのプログラムを考えてくれていました。国内唯一の精神科病院で首都の郊外にあるメレン病院(Centre National de la Santé Mentale Melen)は2014年5月からストライキ中なのでしたが、我々の到着に合わせてるかのように、院長が一方的にスト終結宣言をし、出勤していました。そして、外国人であることをいいことに、院長派、反院長派、中間派(ストは嫌いで淡々と仕事をしたい人たち)それぞれに会ってきました。

日本と違い、外来診療で最初に患者さんの診察するのは、Technicien supérieur en santé mentale

（精神科専門上級看護師）です。処方や注射の指示も出します。ストライキで新規の入院は受け付けておらず、興奮している躁状態の患者さんには日本の基準では使わない量の抗精神病薬の筋注で対応していました。専門看護師で対応不十分なケースのみ、病態に応じて精神科医や臨床心理士につながります。

もともと、精神科医は国に3人しかおらず、うち1人は軍病院勤務で軍の組織下にあるため、一般市

民に対しては実質2人です。うち1人のステファニー医師は定年間近であまりやる気がなく、我々に対して「診療やりに来てくれたの？え、なんだ見学だけなの」といった調子でした。頼みの綱はメレン病院の前院長で人望が厚いブング先生ですが、国の保険政策の仕事で忙しく、首都の街中のプライベートクリニックの診療もあり、病院での臨床に割ける時間が限られます。また、コンゴ人（RDC, République



写真1 メレン精神科病院（国立精神医療センター）



写真2 慢性期患者用病

démocratique du Congo [旧ザイール]出身)で、この国では周辺諸国からの移民に対する差別があり、大卒の息子の就職も決まらず、いずれはキンシャサ(RDCの首都)に帰りたと思っています。また、臨床心理士のビスィム副院長は院長派ですが、マウンボ心理士はストライキを支持する反院長派のホープです。そんな訳で、Technicien supérieurのみなさんがいなければ、精神科の診療がまったく回らない状態でした。

そして、ソーシャルワーカーによる家庭訪問ですが、日本と違うと思ったのは、診断名についてさして気にしていない、ということでした。日本だとあくまでもこのような疾患であるという前提があって、その上で患者さんの生活状況を考えて援助する、ということだと思います。それが、ガボンでは疾患にとらわれず本人が置かれている生活状況を調査して、社会保障の手続きの仕方を教えたり、場合によっては一緒に手続きに行ったりします。ガボンは農業国ではなく、人口159万人の85%が都市住民で、CNAMGS(クナムジェエスと読みます。Caisse Nationale d'Assurance Maladie et Garantie Social, 健康保険社会保障公庫)という社会保険制度があるので、これは政情不安定な国ばかりの中部アフリカにおいて、実にガボンの輝きとってよいことだと思います。

しかし、スト中の病院の話に戻しますと、慢性の患者さんたちは、食事の支給以外は放置されている状態で、日増しに悪くなっている人もいます。ラジオを聞いていて日本の地震を知っている人もいました。その患者さんはもう治ったから薬を飲んでいないと言っていました。ストライキで投薬がストップしているのを本人がそのように解釈しているだけかもしれません。また、閉鎖病棟の保護室は、窓ガラスが破壊されているところもありました。扉も木製でした。

ガボンは、サハラ砂漠以南のアフリカの中では医療レベルは高いようですが、精神科診療については、医学生ですら精神病患者のそばに行くのがうつるなどと考えているらしく、精神科医になりたいなどと言えば家族親戚から気狂いの面倒を見るのかと猛反対に遭うそうです。全体のシステムでみたらカンボジアよりガボンはしっかりしているのかもしれませんが、長期のストライキをする文化があり、これは変えられそうにありません。しかし精神科患者への差別は改善していく国のプランがありますし、住民の意識も変わっていかねばならないと思います。

また、現院長はロシア留学歴があり、精神科医で

はなく、政治力で院長に就任し、病院の金を使い込んだと言われていますが、新病棟を建設するプランを考えていました。特に慢性患者用の病棟は蚊帳もなく老朽化がひどいので、それについてはぜひ推進してもらいたかったです。

精神科医療視察以外では、ランバレネのシュヴァイツァー病院見学と宿泊、ボートで野生のサルやカバを見てきました。そして、帰りの飛行機は途中から頭痛にみまわれ、嘔気もきて体調を崩し、帰国するまで本当にしんどいフライトでした。

病院で会ったみなさんは、フランスやセネガルに留学歴がある人が多く、フランス語と合わせてこちらでも知的な強さがないと、彼らとは渡り合えないな、と強く感じました。実に刺激的な旅でした。(了)

III事務局からのお知らせ

1.SUMHカンボジアスタディーツアー無事終了!

2015年2月16日(月)~20日(金)に実施されたスタディーツアーには精神科医の方や看護学生の方たち、そしてタイの精神科医の方も参加されました。ツアーの様子はFaceBook「特定非営利活動法人途上国の精神保健を支えるネットワーク」に西尾先生がツアー中に撮影した写真や記事から知ることができます。次号のニュースレターで参加者の感想分を掲載予定です。



2. 会員が100名を超えました!

2月の時点で正会員と賛助会員をあわせて100名を超えました。会員が増えとてもうれしいです。会員になられた皆様は毎月1回開催される定例会議へ参加できます。会議の開催日程はFaceBookで確認できます。※FaceBook内の検索バーに「特定非営利活動法人途上国の精神保健を支えるネットワーク」もしくは「SUMH」を入力して検索してください。定例会報告の最後に次回開催日時と場所の記載があ

ります。参加の際にはメールでご一報ください。毎月、和気藹々と会議しておりますので、皆さまもお気軽にご参加ください。ご連絡お待ちしております！

3. 5月に総会を開催します！

以下の日程で総会を行います。スタディツアー報告会も開催予定なのでお時間都合よろしい方は是非ご参加ください。

開催日時 : 平成27年5月24日(日)
14時00分～16時00分
開催場所 : 錦糸町クボタクリニック5F
(JR総武線錦糸町駅北口より徒歩3分)

- 主な議題 1)平成26年度会計活動報告
平成27年度予算活動計画
2)今後の活動方針について

スタディツアー報告会
ツアー参加者による発表を予定しています。

SUMH Cambodia

Actual Address,
Mental Health Rehabilitation Center,
in Siem Reap Provincial Hospital,
Mundol Moi, Siem Reap, Cambodia

Postal Address:
P.O.Box 93102 G P O Siem Reap Angkor, Cambodia

SUMHの会員として、また募金によって
一緒に途上国の精神保健を支えてください。
【年会費】一般 10,000円 賛助・学生 5,000円
【会費・募金の振込先】

銀行振り込みの場合
銀行名;千葉興業銀行 旭支店
口座名;途上国の精神保健を支えるネットワーク
理事 青木 勉
口座番号;普通 1031181

郵便振替の場合
加入者名;途上国の精神保健を支えるネットワーク
口座番号;00170-2-535294

郵便振替は振替用紙に、住所・氏名・Tel & Fax・E-mail・
会費と募金のいずれか・SUMH へ一言を明記の上、お
振り込み下さい。

SUMH日本事務局

〒130-0013 東京都墨田区錦糸3-5-1
錦糸町北口ビル
TEL 03-3812-0736
HP: http://sumh.org/
Mail: info@sumh.org

編集後記

日増しに暖かくなり過ごしやすい季節となりましたが、
皆様にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
2014年度は国内の景気変動に伴う活動資金の減収から、
月例会議では資金難をどう乗り切ることが常に議題に
挙がっていました。この1年を振り返ると、「活動拡大と
資金難」がキーワードでした。年度初めに現地SUMH
の活動が評価され、クララン地区への活動拡大という
嬉しい展開がありました。その結果あらたな支出が生まれ
毎月のように資金不足で悩み続けることになったのです。
「このままでは来年度でいよいよ活動終了になるか？」と
定例会議のたびに話題に挙がるようになりました。

私たちは資金難の状況をどう解決したらいいか、カンボジアSUMHとSkypeを使い月例会議で話し合い、
継続していく方法を模索しつづけてきました。結果的には、
会員の皆様からのお力添えをいただけたおかげで、17年目を何とか終えることができました。心から感謝しております。

とはいえ、資金難の状況はいままだ続いており、この難局をどうのりきることが次年度の課題でもあります。
カンボジアSUMHスタッフの活躍をみるとまだまだ続けていかなければという思いであります。

今後とも皆様のご協力とご支援をいただきながら続けていきたいと考えておりますので次年度もどうぞよろしく
お願いいたします。また、活動内容がより一般の方々の方に届くことを願いつつ、何よりも皆様のご健康とお幸せを祈願してご挨拶とさせていただきます。

事務局担当 篠原 慶朗

ご寄付のお願いです
「年賀状等の、書き損じはがきを寄付して下さい」
皆様が年末作成した際の、年賀状等の書き損じはがきを寄付お願いします。支援活動に有効活用させていただきます